



JOTO IZAN



藍アイ

城東渭山同窓会 東京支部 会報

No.17 創刊17号 平成23年4月1日発行

発行人/戸田浩二
〒231-0032 横浜市中区不老町1-6-9
第一HBビル 株式会社サイバービジネス内
電話 050-3424-3555



学校長 毛利 久康

会員の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

日頃は、母校のため物心両面からの暖かいご支援を賜り、厚くお礼を申し上げます。

同窓会からのご支援につきまして平成22年度の一端を報告させて頂きます。「君の夢に百万円」の支援事業では、国際的に活躍するバイオリニストをめざしている二名に對しまして、ウイーン国際ゼミナールの参加や日本音楽コンクール参加などの費用を支えて頂きました。

また、「寂聴奨学金」により経済的支援を頂きました三名は、充実した高校生活を送ることが出来ており、その中で今春卒業した者は、看護師の道をめざし、四年制大学に進学出来ました。

そしてこの一年は、特に猛暑の夏と厳寒の冬でしたが、同窓会の皆様によって設置されました空調設備のおかげで、生徒は他校の半額以下の少ない維持費の負担だけで、快適な学校生活を送ることが出来ており、深く感謝をいたしております。

校舎も新しく生まれ変わり七年が経とうとしていますが、他校に追いつく許さない崇高な姿を保っています。その中に、懐かしい赤煉瓦、校歌「渭山の山かげ」の碑、そして門柱、ユーカリの木、創立記念のミニユメント

などが、それを見ながら登下校する生徒は、伝統の重みを受け止め、将来社会に貢献する責任を強く心に刻みながら精進しているところ。特にユーカリの木は、四階建ての校舎に負けじと空に伸び上がるその姿は、生徒の成長を象徴する毅然とした姿です。同じユーカリの木が、徳島大学総合科学部（もと徳島県師範学校）と城南高等学校（もと徳島県立徳島中学校）にもあることは、人を育ててきた歴史がその姿に重なるって見えます。

昨年も書かせて頂いた関寛齋の事ですが、その後も創立九十周年記念事業で制作したミニユメント「慈愛進取の碑」を見るために彼の生誕地千葉や開拓した北海道から来られる人が後を絶ちません。近くの川沿いにあるインド砂岩で出来た関寛齋像も紹介をしております。関寛齋は、江戸の末期から蜂須賀藩の藩医として徳島に入り、本校の敷地内に居を設け、約三十年貧富の差なく医療を施し、七十二歳からは北海道の開拓に取り組み、自作農育成に偉大な実績を残された人です。

学校の現状についてですが、進学成績につきましては約半数の生徒が国立大学へ合格出来ています。私立大学も東京の早稲田など難関校に約二十五名、関西の関西学院など難関校に約百人が合格しています。また部活動につきましては、体育部で、夏の全国総体に男子バスケットと女子バドミントンが出場しました。冬の選抜大会では、男子バレーボールと女子バドミントンが県大会で優勝しました。四国大会では女子バドミントンが土佐女子高校など私立高校に勝利し、冬としては初めて四国チャンピオンとなり、二十四チ

ームしか出られない全国選抜大会に四国代表として参加しました。文化部では、邦楽部や百人一首かるた部が全国大会に出場し、徳島で行われた中四国音楽教育研究大会では、オーケストラ部が高校を代表して文化センターで模範演奏を披露しました。殆どの部が県のトップレベルにあり、「一人ひとり文武両道」のもとがんばって来ています。

また、高校生が金融や経済の知識をクイズで競う「エコノミクス甲子園」が徳島県でも始まり、専門高校も参加する中で、本校人文コース一年生二人が初代チャンピオンになり、東京での全国大会に出場しました。ここ十年の卒業生では、平成18年卒で広島カープに入団した武内久士さんが、ウエスタンの最多セーブ王になり、一軍でも五試合に投げました。そして平成13年卒の長江明生さんが、中国広州でのアジア大会男子バレーボールに出場し優勝しました。4月末の創立記念講演会では、平成8年卒「チームラボ」代表取締役社長猪子寿之さんから、ベンチャー企業を立ち上げ成功に至るまでの話を聞き、将来への意欲と勇気を与えて頂きました。

このように、県下一恵まれた環境で、同窓会と地域に支えられ、先輩の皆様の活躍に励まされながら、本校の生徒は本心に幸せだと思っております。

同窓生の皆様が母校として誇りに思っている鋭意努力を続けて参りますので、今後ともご支援を宜しくお願いいたします。

最後にになりましたが、同窓会東京支部の益々のご発展と会員の皆様のご健勝をお祈りいたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

東京支部だより
東京支部長 戸田浩二(城東26回卒)

昨年の東京支部の総会は6月の第2日曜日である13日に開催されました。

今回の開催場所は、池袋サンシャイン60の5階にあるクルーズクルーズです。私はスカイツリーは確認出来ませんでした。幹事年である28回の方々に頑張って頂いたこともあり、

約70名の参加がありました。総会では、創立100周年の時から実施されている奨学金制度「君の夢に100万円」の最初の受賞者である瀧花絵里奈さんの素晴らしいバイオリン演奏が行われ、参加者の皆様から温かい拍手を頂きました。皆様が学校の先輩であるという中で、演奏は緊張されたものと思いますが、しっかりと演奏して頂きました。私は、100周年記念式典に東京支部として参加し、瀧花さんの受賞を見ておりましたが、成長された様子がよく分かりました。

今回は同窓会本部藤田会長、並びに毛利校長より現役学生のクラブ活動への支援と110周年記念への支援として寄付のお話が有りました。母校の為に関東地区の同窓生が協力出来ることがあればと思いますので、総会会報にも協力をお願いしたいと思っています。

実は、今回の会場のクルーズクルーズのマネージャーのお母様が徳女出身ということ、徳女の皆様方が関東で根を広げているということが実感出来ました。ただ、お母様には残念ながら高齢のためか、ご参加は頂けませんでした。

お料理の方は、近年なるべくお一人ずつお出しするのが恒例になっていて、今回も同様でしたので皆様にご堪能頂けたものと思います。

今回も、総会への徳女の方の参加がなく、城東出身者による総会となっているのは寂しい限りです。昨年に引き続き、なるべく会報に近況を寄せて貰える様働き掛けていきたいと思っております。また、若い30代、20代の方々の総会への参加、Webでの情報交換も増やしていきたいという

同窓会だより
東京支部だより

同窓会だより
東京支部だより



城東49回 阿部絵里奈さんのコンサート情報です。

【~flute ensemble eff Duo concert vol. 2 organ&piano~】
日時：2011.5.20(金) 18:30 開場 19:00 開演
場所：キリスト品川教会
チケット：¥3,000(税込 全席自由)
フルート：阿部絵里奈 林晃子/オルガン：西優樹
ピアノ：須藤千晴
《プログラム》
J.S.バッハ：トリオ・ソナタ ト長調 BWV1039F.ドップラー：リギの思い出...他

お問い合わせ：ヴォートル・チケットセンター 03-5355-1280

「フルートアンサンブル eff」は2004年にフェリス女学院音楽大学音楽学部卒業生の杉浦容子・目黒裕子・阿部絵里奈・林晃子によって結成されました。これまでに、横浜みなとみらいホール、キリスト品川教会等でのリサイタルをはじめ、徳島新聞社主催「はぐくみマタニティーコンサート」に2007年より毎年出演、宮崎県都城総合文化ホール開館一周年記念コンサート、愛知県岡崎市環境シンポジウム、フジテレビ主催ホットファンタジーお台場、ラ・フォル・ジュルネに出演するなど、多彩な演奏活動を行っています。今回は阿部絵里奈・林晃子の二人による『デュオコンサート』をお楽しみください。

フルートアンサンブル eff オフィシャルホームページ
<http://www.fff-flute.com/>

ことも引き続き行っていかねばいけないことですが、関東にいらっしやっても大学卒業後の消息を把握するのは難しく、もし、この原稿をお読みになられた方のご家族、お知り合いの方々に関東在住の方がいらっしやるようであれば、是非、Webから登録をして頂ける様お勧めください。 <http://www.izan.jp>から登録出来ます。

最後になりましたが、昨年も徳島から遠路ご参加頂きました同窓会本部、並びに城東高校の方々、厚くお礼申し上げます。また、今年の総会幹事の方々、学年幹事の皆様、事務局の皆様、どうもありがとうございました。今後とも、ご協力よろしくお祈り致します。

収支決算表 平成21年9月1日~22年8月31日 (単位:円)

収 入		支 出	
前年度繰越金	907,397	総会費用	517,000
維持会費	502,500	印刷費	234,150
総会会費	452,500	通信費・雑費	176,782
助成金	17,000	会議費	23,869
寄付金	52,000	総会雑費	13,394
協賛金	50,000	サーバー維持費	57,624
利子	301		
		小計	1,022,819
		次年度繰越金	958,879
	1,981,698		1,981,698

貸借対照表 平成22年8月31日 (単位:円)

借 方		貸 方	
ゆうちょ・総合口座	863,780	次期繰越金	958,879
ゆうちょ・振替口座	26,500		
現金	68,599		
	958,879		958,879

会費納入のご案内

年会費の納入にしましては、なるべく同封の振替用紙をそのままご使用頂きATMをご利用下さい。支部の手数料負担が120円(窓口)→80円となります。

徳女の方々、並びに学生の年会費は免除となります。

事務局からのご連絡

事務局メンバーは2年が任期となります。本年、9月以降に支部長、副支部長、会計をご担当頂ける方を募集致します。学年持ち回りですので、城東23回、25回、27回以降の方を中心に担当頂ける方を募集致します。

城東渭山同窓会
東京支部

支部長 戸田浩二(城東26回)
会計 大久保史子(城東28回)



「近況と思ひ出」

城東34回 矢野久美子

「城東高校出身でしょ」と同僚で先輩の谷知子さんから声をかけられたのは、6年くらい前のことでした。うか。25年以上前に東京の大学に入ってから、徳島県出身者とさえほとんどめぐりあっていたいなかった私は、こんなところでも同じ高校！とびつくりし、とてもうれしく、思わず抱きつきたいほど心強く感じたのでした。たしか百周年か何かの名簿で発見されたとのこと。その谷さんを通じて、同窓会関東支部の存在を知ることになりました。

私は今、横浜のフェリス学院大学でドイツ語やドイツ政治文化論などを担当しています。就職して13年がすぎました。その直前までは2年半ほどドイツのケルンに子連れ留学してました。ドイツに行くまでは、仲の良かった城東高校時代の同級生たちと子連れで会ったり、互いの家を行き来したりしてました。でも、留学以後は、引越したり仕事でたばたし、また、友人たちもご自身やお連れ合いの仕事の関係などで海外赴任したりして、今ではほとんど年賀状のみのやりとりになってしまった方も多く、毎年「今年こそは会いたいね」と書き合っています。

城東高校の建物は、帰省するたびに必ず車で前を通ります。あまりにも立派になって制服もとても可愛くなっている様子。当時の私たちのダサさ（それでもすごく楽しかったけれど）を懐かしく思い出します。教えて頂いた先生方はもういらっしやらないし、訪れる機会もありませんが、一昨年翻訳書を出した時に、担当の編集者宛てに「矢野久美子さんは私の教え子の一人です。よろしくお伝えください」と葉書を書いてくださった先生がいらっしやいました（英語の勝西先生）。感激でした。

ところで、ある時、谷さんが職場のある宴席で「城東高校校歌を歌おう！」と言ったのです。その時私はまったく思い出せなくて、谷さんが校歌を覚えていて、谷さんが驚き、自分の記憶力のなさに愕然としたのですが、後日断片的に蘇ってきました。でもあ

やふやで、潤山が出てきた、でもそれは中学の校歌かも、といった次第です。最初の方は完璧になっても最後まで行きます。そこでインターネットで検索し、城東高校のホームページへ。すると、なんと曲まで聴けるではありませんか。情報時代ですね。そこでやっとなさけりしたのですが、今度は、当時体育祭か文化祭の後で夕方沖の洲海岸でやったファイアーストームで歌った歌がいくつか頭に蘇ってきました。旧制高校の寮歌なども歌っていましたが、「城東」「城東」というフレーズもあつたはず。この行事がなぜあつたのか、「城東」の歌は誰が作ったのかなど、もしご存知の方がいらっしやたらお教えください。

「ミャンマーで井戸の寄贈！」

城東16回 岡部義典



ミャンマー、旧国名ビルマ。私の年代では、三國連太郎・安井昌三氏出演の「ビルマの罫琴」（下つては中井貴一・石坂浩二氏によるリメイク版があります。）での情景を思い浮かべる方が多いと思います。

今は「軍事政権の国」、そしてアウン・サン・スー・チー氏の名前を思い浮かべる事が出来ます。日本も加わって行われているその政権に対する国際的な経済制裁。その現状が「とても遠いアジアの国」のイメージを作り上げています。

そんな「遠い国」への旅をしたのは、同期の竹口省三氏がNPO法人を設立して2002年以来続けられている「ミャンマーで井戸を掘り豊かな水を！」提供するためのボランティア活動に参加するためでした。昨年の2月末の事

でした。

行くまでは気軽に構えて、寄贈した井戸設備の贈呈式に出て、軍事政権であるがゆえに世界遺産に認定されない!?（隠れたすばらしい世界遺産候補かと思える）仏教遺跡群を見よう！そんな気軽な気持ちで、それでも「安全性は？食事は？」等々。16回生と関係者で総勢12名の旅。（寄贈は15名によるものでした。）実際は竹口氏の手導がなければ、なかなか勇気の要る旅立ちでした。

井戸の掘削場所はヤンゴンから車で約2時間のマウビン地区。ここは2008年のサイクロン「ナルギス」で大被害を受けた地域です。この地域は外国人の入境が制限されていて、「贈呈式」への参加を条件に特別許可を受けての（入境）訪問でした。

ヤンゴンから車で2時間。そこから船で川を約1時間。やがて川辺に人だかりと音楽が!!昔良く見た「ウルルン滞在記」そのままの情景が広がり、岸辺の泥に船の舳先を乗り上げて船から渡された30センチ幅の板で、泥水の川を渡って上陸!!音楽や踊り!村人総出の迎えを受け、手作りの花束と花の首飾りをプレゼントされ、更に村までの道を牛車に揺られて贈呈式場に! 民族衣装を頂き、音楽と舞踏の歓迎を受けマウビン地区の長や村長さんのご挨拶など。テントの中の私たちの机の上には贅沢にも果物やココアラが。

村人の多くはもともとも過ごしやすい乾期の2月（最高気温35度）とはいえず炎天下に。あまりの歓迎に、式の途中で竹口氏に「こんなにされるほどの事はしてない!」と思わずつぶやいてしまいました。帰ってきた言葉は「この村の方々にとってはそれほどの事!その気持ちを受けてあげてください。」と・・・同行の諸氏の目にも涙が光っていました。

「それほどの事!!」とは? 船で行った川の泥水!舳先から上陸する時に覗いた汚い水!それが生活用水でした!泥水を汲みに行つて（歩くとき1キロくらい）、その上澄みを煮炊きや飲料にする生活。乳幼児の罹患率も高く死にいたる事も稀でなく、眼病も多い現状でした。とうとうと流れる川!豊かな水量!羨ましい限りですが、ミャンマーの水は残念ながらとても良い水とは言えず、旧首都ヤンゴンでも

人々はミネラルウォーターしか飲みません。

今回の井戸は打ち抜きで、約85メートルの深さが必要でした。浅い井戸では飲料には適さない水しか得られませんが、掘って行く過程で水質検査を繰り返し、安定して飲料になる水を得るための深さでした。

今回の寄贈の中心は井戸の掘削・機材・ポンプ・貯水槽・発電機・各家への電気配線。この寄贈に要する費用は約40万円。同じ設備を日本でしたら2千万円と言いつつ切ったのは同行の友人（徳島県庁・土木部門退職）の専門家としての意見です。

NPO法人の人たちがすべてボランティア。ミャンマー人の日本大使館勤務の方も!実際の費用だけで40万円だったのです。他のこの種の活動では、寄付の30~40%は事務費に消える事が多いと言われています。それだけにすごい活動だと思えました。

更に、他の多くの寄贈の場合はハウドウェアの建設に留まる事が多く、その後の維持管理が難しいものが多い現状です。つまり故障などすればとたんに機能不全に陥る事です。

でもこのNPOの活動のすばらしさは、井戸を希望する村の代表と繰り返し話し合い、井戸及び周辺機器の維持システムを作り上げていく事です。

汲み上げるポンプを動かすには燃料油が必要です。その費用とメンテナンス及び設備更新の費用の備蓄システムを作り上げています。各家庭では明かりを灯すのにローソクを使っています。その費用が約7円/日、1ヶ月で約200円。その費用を拠出してもらい発電機を動かして、毎日夕方6時から夜9時まで、各家庭に配電して明るい夜を提供しました。7円/日で得られる灯りよりもずっと明るく、風が吹いても消えない灯りです。子供たちも夜にも本が読めるようになったのです。

630戸の村でした。約2万円弱/月の基金が集まります。大学卒業生の初任給が\$60~70くらいのミャンマーでその金額は油代どころか故障や、いざ起る設備更新まで可能にするすごいシステムです。そのうえ、村の人たちの負担により運営される事で共有財産化する、つまり大切にされる結果を生んでいるようです。

なにも無いと言いつつすきかもしませんが、そんな場所に街灯が灯っている事を想像出来ますか!明るい街

灯の下では読書も出来ます。発電によってラジオなどの電気製品が使えるようにもなっています。美味しく安全な水と、明るい電化生活!まさに生活文化の革命です。

「それほどの事!」とは結果としてNPOと現地スタッフの方々の努力によって実現した、この事だったので。前述のサイクロン「ナルギス」でも井戸を得た村では手押しで水を汲み、誰一人病気になることがなかったそうです。水を媒介とした伝染病は本当に恐ろしいものです。

竹口氏の行っているNPO法人の井戸の寄贈は年間5つの村を対象に行われています。NPO法人が永遠の命を得て、いつまでも世界各地でのシステムを構築されん事を望んでやみません。私たちの寄贈も貯水槽の壁にTokushima Joto High School JAPANの文字と、漢字で個人名を記した「銘板」がかけられています。

現状では外国人の入境が認められない場所に、現地の人には模様には見えない漢字で書かれた名前の数々。も一度行く事も、見る事も出来ませんが、本当は「銘板」は必要ないとも思いますが、大きくなった子供たちが英語を読めるようになったら、日本人が協力してくれたいと考えてくれるでしょう。

ミャンマーの人たちに素敵なプレゼントをする機会を頂きました。NPO法人「OASIS」と代表の竹口省三氏に感謝します。そして今年もミャンマーへ!



「徳島つながり」

城東33回 折原茂晴

城東高校を卒業して30年ほどになる。徳島に帰るたびに、城東高校の前の道を車で通ることが多い。隣の市民プールや動物園がなくなつて久しい。城東の校舎も数年ごとに少しずつ建て替えられ整備が進んでいるようだ。

さて先日、職場の徳島県出身者と久しぶりに夕食をともにする機会があつた。これまで何度か県人で集まつたことがあつたので、その時も「明日、空いていれば夕食でもいかがですか」といった調子で数名が集まつた。

乾杯が進み、田舎の思い出や様々な話がはずむ中で、特に一人の人に注目が集まつた。というのも、その人はなんととも言えない幸せなオーラを体全体に漂わせていたからだ。その柔和な顔やしぐさから発する、なんとも人を温かな気持ちにさせる雰囲気は、ついその場にいた全員に「何か良いことあつたのですか」と質問させてしまうほどであつた。どういうわけか、髪型や服装など、外見的には以前とそう大きな変化はないにもかかわらず、顔がほがらかと輝き、微笑みからは温かさがにじみ出て、数年は若返つたような印象さえ与えた。

なぜだろう。みんなそれぞれとなく色々質問してみた。私生活や仕事に関連して、周回的な説明はあつたが、お酒も手伝つて、結局、最後まで決定的な理由が分からずじまい。もしかしたら、私が気づかなかつただけで、その方は、以前からそのような幸せのオーラを発していたのかもしれないし、やはり、私たちの見立て通り、何かが変わつたのかもしれない。

いずれにせよ、美しい内面、温かな幸せがにじみでる、そのような「幸せのオーラ」に、強く心を打たれた。そういう内から発するものは、その人の基本的な考え方や視点、生き方の基軸などからくるものだろう。と、私は勝手に解釈して、その方とともに同じ時間を一緒に過ごせたことに感謝し、自食会の一つとなつた。

外務省国際協力局事業管理室 首席事務官